

クィア・スタディーズの視点からみるカミングアウト

- 多様な生き方が認められる社会へ -

指導教員：水越康介准教授

氏名：亀山楓莉

頁数：20

目次

1. はじめに	3
2. カミングアウト	4
2-1. LGBT 層の増加とカミングアウト	4
2-2. カミングアウトをする理由（伝える側の観点から）	5
2-3. カミングアウトとの向き合い方（伝えられた側の観点から）	6
3. クィア・スタディーズ	7
3-1. クィア・スタディーズとは	7
3-2. 三つの視座の応用－同性婚を例に－	10
4. 先行研究の意義と限界	12
5. インタビュー分析	13
5-1. インタビュー概要	13
5-2. 伝える側、伝えられる側としてのカミングアウト（インタビュー結果）	13
5-2-1. 受け入れてもらえない苦しみ	13
5-2-2. 自分を肯定的に受け入れる	14
5-2-3. 自分らしく生きる	15
5-2-4. 伝えられる側としてのカミングアウト	15
5-3. 日本におけるセクシュアルマイノリティ（インタビュー結果）	16
5-4. クィア・スタディーズの視座からの検討・分析	16
6. まとめ	18
7. 参考文献、参考資料	19

1. はじめに

世界的人気バンド「Queen」のボーカル、フレディ・マーキュリーを描いた映画「ボヘミアン・ラプソディ」が現在大ヒットを記録している。フレディは1991年にエイズによる気管支肺炎で亡くなっているが、映画の中ではフレディが自身のセクシュアリティに気づき、葛藤する様子が描かれている。フレディはゲイであったが、そのことを公にカミングアウトしたことはなく、エイズで闘病していたことも公表していない。公にカミングアウトをしなかったのは、フレディの両親による影響や、当時エイズがゲイの病とされ、同性愛者が拒絶されていたという時代背景があったからだと言われている。フレディが亡くなってから25年以上が経ち、現在では同性愛者を含め、セクシュアルマイノリティを取り巻く環境は当時に比べ大きく変化している。医学の進歩によりエイズはゲイだけの病ではないことが常識となり、さらには死の病でさえもなくなっている。自身のセクシュアリティについてカミングアウトする著名人が増え、セクシュアルマイノリティへのサポートを表明する企業も相次いでいる。インターネットやSNSの発達もあってか、一般人の中にもセクシュアリティをオープンにする人が増え、それを肯定的に捉える人々もたくさん存在する。LGBTという言葉が誕生し、LGBTに対するいじめ問題や同性婚に関する議論が活発に行われるようになってきている。フレディが今の時代に生きていたなら、死の間際まで孤独に苛まれて生きることにはなかったかもしれないし、そもそも亡くなることもなかったかもしれない、という考えが映画を鑑賞後頭から離れなかった。そうした葛藤や孤独感を抱えていたことが、素晴らしい音楽に影響を与えていたかもしれないが、フレディがカミングアウトを公にできていたならどうなっていたのか、どうしても考えてしまう。

当時に比べてセクシュアルマイノリティがありのままに生きやすくなっているのは事実である。だからといって差別や偏見がなくなったわけでも、また、全てのセクシュアルマイノリティが不自由なく生きているわけでもない。特にカミングアウトという行為については、カミングアウトをする人が増加しているとはいえ、必ずしも肯定的に捉えられるものではなく、いざ身近な存在の人にカミングアウトをされたら戸惑ってしまう人も少なくないはずだ。本論文では、カミングアウトをしている当事者にインタビューし、インタビュー内容をセクシュアリティに関する現象を一定の視座に基づいて研究する学問であるクィア・スタディーズの観点から分析、検討し、カミングアウトがどういった可能性や問題を孕んでいるかを明らかにする。構成としては、まずカミングアウトの現状について説明し、一般に、伝える側はなぜカミングアウトをするのか、伝えられた側はどのような態度や行動をとるのかを把握する。次にクィア・スタディーズがどういった学問でどのような背景から誕生したのか、クィア・スタディーズの視座とは何かを説明する。そして、本論文の最後でカミングアウトに関するインタビューをその視座に基づいて分析するにあたって、その視座の使い勝手を同性婚という問題を例にして確認する。また、本論文ではLGBTはレズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダーの総称として誕生した言葉であるので、参考文献や資料でLGBTという言葉が使用されている場合を除いて、基本的により広義な意味

を持つセクシュアルマイノリティという言葉を使用する。

2. カミングアウト

2-1. LGBT 層の増加とカミングアウト

近年、インターネットの普及や SNS の発達と共に、セクシュアルマイノリティの人々の存在がより可視化できるようになってきた。特に日本において、「LGBT」という言葉の浸透率は、2015 年に電通ダイバーシティ・ラボが全国約 7 万人を対象に実施した調査では 37.6%にすぎなかったが、2018 年の同調査（全国約 6 万人が対象）では 68.5%であり、たった 3 年間で 30.9 ポイントも増加している（dentsu NEWS RELEASE、2015 年 4 月 23 日、2019 年 1 月 10 日）。LGBT 層に該当する割合も、2012 年調査で 5.2%、2015 年調査で 7.6%から 2018 年調査では 8.9%へと増加している。ただし、2012 年調査は 2015、2018 年調査と質問方法が異なるため、単純比較はできない。LGBT 層の増加の要因としては、LGBT に関する情報量の増加に伴う一般理解の増大や、LGBT により理解が深い若年層の比率がアンケート対象構成の中で増加したことが挙げられる。

世界に目を移すと、アメリカでは LGBT 人口が推計 5%前後にすぎないが、その存在感は増しているという。LGBT 市場に注目した様々な企業がキャンペーンを展開し、さらには芸能人やスポーツ選手、大手企業の CEO など数多くのスターたちが次々にカミングアウトをしている。スターたちのカミングアウトのきっかけの一つは、当事者へのいじめによる自殺が相次いだことから、有名人がカミングアウトをすることでマイノリティたちを勇気づけようとしたことである（『日本経済新聞』、2014 年 9 月 9 日、夕刊 2 頁）。特に若年層においてはカミングアウトをする有名人の存在や有名企業の支持、友人や家族のカミングアウトが可視化されるようになったことなどが相乗効果を生み、アメリカ社会の世論の変化に貢献している。

しかし、カミングアウトという問題は LGBT に対する理解が進んでもなお困難な状況に置かれている。株式会社 LGBT 総合研究所が 2016 年に LGBT 当事者 337 人を対象に実施した調査において、LGBT のカミングアウト意向は 41.3%であったが、実際に LGBT 以外の友人に対してカミングアウトをしている割合は 13.0%、家族に対しては 10.4%、職場環境にいたってはわずか 4.3%と、実際の当事者のカミングアウト率は低いのが現状である（株式会社 LGBT 総合研究所、2017 年 2 月 8 日）。また、別の調査では、職場環境に対してカミングアウトをすることに抵抗感を持つ人がいまだ多く存在することも明らかにされている。しかし、カミングアウト率が低いとはいっても、以前より LGBT 当事者を目にする機会やそうした話を聞くことは多くなっている。自らゲイであるとカミングアウトし、LGBT に関する活動や本の執筆を行っている砂川秀樹氏は、「(2007 年にカミングアウトに関する) 本を出版してからこの 10 年間の間に、カミングアウトをする人は増え、自分がゲイやレズビアンであることを完全にオープンにする人も多くなった」と、LGBT 当事者の立場からカミングアウトをする人々の増加を実感している（砂川、2018、p7）。周囲のカミ

ングアウトをしている人々はもちろんのこと、芸能人やスポーツ選手も年々増加しているように感じる。また、ほぼ毎年行われている東京レインボープライドなどのパレードは、一般人にもセクシュアルマイノリティがたくさん存在することを社会にアピールしており、年々その規模も拡大している。その一方で、現在でもカミングアウトに対する意見の相違や、カミングアウトをする際の当事者の心の葛藤は以前とあまり変わらないとも述べている。アメリカにおいても世論が LGBT に対して肯定的に変化してきたとはいえ、カミングアウトによるヘイトクライムやいじめは後を絶たないという（『日本経済新聞』、2014年9月9日、夕刊2頁）。

2-2. カミングアウトをする理由（伝える側の観点から）

セクシュアルマイノリティは、リスクがあることを承知の上でカミングアウトをする。そして、カミングアウトをする理由は人によって様々である（砂川、2018）。我々は幼い頃から、テレビや本、歌、何気ない会話といったありとあらゆる場面において異性愛が肯定されている様子を目にしてきたため、男性は女性を、女性は男性を必ず好きになるという異性愛規範が無意識的に植え付けられてきた。そのため、自分が異性ではなく同性を好きになってしまった時に強い不安や恐怖を感じる。特に中高生といった思春期は同性に恋愛感情が向くことに対して罪悪感や嫌悪感を抱きやすく、そうした悩みを誰かに相談するために友人や学校の先生にカミングアウトを行う場合もある。また、人は恋愛話や自分のプライベートの話などを通じて親交を深めるものである。自分の大切な人を親しい人に紹介したり、自分が嬉しいことを共有したり、自分が抱える悩みを親しい人に相談して支えてもらいたいとも思う。異性愛者にとってはそれができて当たり前だが、他方、セクシュアルマイノリティにとってはそれらを隠すのが当たり前になっている。カミングアウトは、異性愛者と同じようにそうしたことを隠さず、それによって周囲の人間とより親密に関わっていけるような人生を送るためにされる場合もあると考えられる。

異性愛者と誤解されないためにカミングアウトを行う場合もある（砂川、2018）。あるレズビアンカップルの女性は、自分の親にはパートナーのことを仲のよい友人であると紹介していたのだが、親がそのパートナーに対して異性愛者を前提として話をしていたことでカミングアウトを考えるようになったという。社会では異性愛をめぐる話が至る所でされており、非異性愛者が自分のセクシュアリティを公言していなければ、ほとんどの場合異性愛者であると誤解される。そういう点で非異性愛者にとっては、「自分の本当の指向を言う/言わないを判断しなくてはいけない状況（砂川、2018、p69）」が日常なのである。

また、大切なパートナーの最期に立ち会えないというのもカミングアウトのきっかけの一つである。一緒に暮らしていたとしてもそのことを家族に伝えていない、あるいは一緒に暮らしていない同性カップルの場合、一方に深刻な事態が起こると苦しい立場におかれてしまうことがある。例えば、一方が病気で入院することになった時、パートナーの家族にカミングアウトをしていなければ、どれだけ病室を訪れ世話をしていたとしても、ほとんどの

場合家族が医師から説明を受け、治療方針を決定する。そして、パートナーの最期の時には立ち会うことも困難になってしまうのである。さらに深刻な事態が起きた時は家族も不安や悩みを抱えているため、そのような時に二人の関係性を伝えるのは難しい。そのため、深刻な問題が起きてしまう前に、家族に二人の関係を伝え、理解を得ておくことが必要である。

カミングアウトは単に自分のセクシュアリティを相手に伝えるのではなく、多くの場合、自分の話や思いを共有したい、そしてそうすることで他者との関係性をより強固なものにしたいという思いが込められている。そして、カミングアウトによってセクシュアルマイノリティである自分を他者に理解してもらい、受け入れてもらうことができれば、自分自身を肯定してありのまま生きていくことができるのである。

2-3. カミングアウトとの向き合い方（伝えられた側の観点から）

カミングアウトは伝える側だけの問題ではなく、伝えられた側がどう受け止め、どのような態度や行動をとっていかかが求められる問題でもある。

まず、身近な人へのカミングアウトの中でも難しいとされる家族、特に親についてである（砂川、2018）。なぜ親へのカミングアウトが難しいのかというと、親が日頃からセクシュアルマイノリティなどに関して否定的な言動を示しているのを見たり、世代的にも理解するのが難しい年代であると判断したりし、そういった要因から、伝えることによって親との関係を悪化させたり、悲しませたり、不安感を抱かせたりしたくないと当事者が思うからである。また、日本ではいまだに異性と結婚して子供を持つ家族が理想とされており、その理想とのギャップから、親へカミングアウトをするのは親不孝だと考える人が同性愛者の中にも多い。また、同性愛者、特にゲイの中には家族や、家を継ぐことに重きを置いて異性と結婚する人もいる。こうした価値観は、自分がレズビアンやゲイだと自覚する前から深く根付いてきたものであり、そのために自分を受け入れられなかったり絶望的な気持ちに陥ったりするという。この価値観は親も同様に持っており、カミングアウトをされることで思い描いていた理想像が崩れ、自分の子供の未来を悲観視してしまう。なぜなら日本では、同性婚やパートナーシップの話題はあがるものの、まだまだゲイやレズビアンといった人々は目に見えにくい存在であり、どのような人生を送るのか想像するのが難しいからである。そのため、家族にカミングアウトした後は、そうした話題がタブー化されてしまうことがある。カミングアウトは伝えられた側も受け止めるのに時間がかかることが多い。お互いが理解しあうためにはタブー化し続けるのではなく、時間が経てからでも話し合うことが必要である。

次に、カミングアウトをされた側の行動についてである（砂川、2018）。カミングアウトを受けた側も最初は戸惑い、なかなか受け止められないということは先述の通りである。しかし、自分が受け入れられないからといって、相手を傷つけるような言動はすべきではない。相手を傷つけてしまう行為として問題視されているのがアウトティングである。アウトティングとは、セクシュアルマイノリティであることを第三者が本人の同意を得ずに暴露してし

まうことだが、これが原因で起きた痛ましい事件が一橋大学アウティング事件である。概要としては、2015年4月に同性愛者である男子大学院生から恋愛感情を抱いていることを告白された男子学生が、LINEのグループに「おまえがゲイであることを隠しておくのはムリだ。ごめん。」などと実名を挙げて投稿し、他の複数の同級生に男子学生が同性愛者であることを本人の許可なく明らかにしてしまった(『日本経済新聞』、2016年8月5日、21頁)。男子学生は、自身のセクシュアリティを明らかにした同級生と顔を合わせるとパニック発作を起こすようになり、同年8月の授業中に発作を起こし校舎から転落して死亡した。男子学生は、大学のハラスメント相談室や大学院の担当教授、大学の保健センターの三箇所に相談していた(HuffPost、2018年7月17日)。しかし、大学側による適切な措置は何も取られなかったどころか、ハラスメント相談室は、性別違和がないゲイとは別物であるのに、性同一性障害のクリニックを勧めたという。告白された同級生が勝手にアウティングしたこと、それを誰も戒めず、男子学生のフォローやサポートをする人がいなかったこと、すなわちゲイに対する無理解がこの事件を引き起こしてしまったのである。

しかし、カミングアウトを伝えられた側の行動によって、伝えた側に良い影響を与えた事例もある(砂川、2018)。ある男性は、旅先で知り合い恋心を抱いた男性にメールで告白した。一週間後に返事が来て振られてしまったが、返事には「何もしてあげられないが、話くらいならいつでも聞くよ」と書いてあり、自分のことを考えてくれたことが嬉しかったという。また、大切な人に受け止めてもらえたことで自己肯定感が高まり、それ以来カミングアウトをすることが怖くなくなったという。同性に告白されて驚いたとしても、異性から告白される時と同じような対応をすればよく、それだけでも告白したほうは救われることがある。しかし、そうした告白やカミングアウトをされた時に抵抗感を感じる人の割合は高い。また、身近な人がセクシュアルマイノリティだと分かった時に、それまで抱えていた否定的な感情がいい方に変わる人もいるが、消えない人もいる。大切なのはカミングアウトをする側は、相手が否定、拒絶されることを恐れながらも自分のことを信頼してカミングアウトをしているということを忘れず、そうした否定的な感情を抱えていても、どういった態度や行動をとるかである。ただし、否定的な感情を抱き続けるのではなく、どうしてそのような感情を持つてしまうのか考えることも必要である。

3. クィア・スタディーズ

3-1. クィア・スタディーズとは

クィア・スタディーズは、1990年代に立ち上がった性、とりわけセクシュアルマイノリティに関する一定の視座を共有する諸研究のことをさす(森山、2017、p109-157)。クィア・スタディーズの成立に重要な役割を果たしたのは、HIV/AIDSの問題と、ポスト構造主義の思想の二つの歴史的な動きである。

まず、1980年代、多くの同性愛者、特にゲイがエイズを発症して亡くなっており、各国のゲイコミュニティにとってHIV/AIDSは深刻な問題であった(森山、2017、p110-114)。

なぜ深刻な問題であったかという点、当時 HIV/AIDS が「ゲイの病」とされたうえ、当時のレーガン政権が人々のゲイへの偏見や嫌悪に乗じて治療法や薬の開発を後回しにし、ゲイを見殺しにしたからである。また、ゲイだけではなく、多くのセックスワーカーの女性や薬物中毒者といった社会的弱者もエイズの犠牲になっていた。そうした状況でゲイコミュニティは、それまでの社会運動によって醸成してきたゲイのアイデンティティだけでは、この問題には対処できないのではないかと疑義を抱くようになった。これらのことから、HIV/AIDS 問題は、ゲイ男性への差別の問題であり、様々な経路を通じて HIV/AIDS 問題に帰着してしまう多様な社会的弱者の問題であり、さらにゲイとしてのアイデンティティを重視する社会運動の限界を露呈させる問題でもあった。そして、これらの認識がクィア・スタディーズの視座へと帰着することになる。

次に、ポスト構造主義の思想についてだが、普遍的なしくみ＝構造の存在に着目する構造主義に対して、ポスト構造主義とは、徹底的に構造主義を突き詰めることで、構造主義の裂け目や破綻が見えてくるというものである（森山、2017、p119-122）。例えば、ジャック・デリダの「男/女」「精神/身体」「主体/客体」というような前者が後者を支配する西洋哲学の基本思想、すなわち二項対立に基づくその構造は、精緻に検討することで後者が前者を支えていて、そのヒエラルキーは転倒してしまうこと、さらに前者と後者の境界が不安定であることを明らかにした。この検討の実践が「脱構築」であり、この思想を性差別に当てはめることで、多くの重要な業績が生まれた。また、クィア・スタディーズにとってより重要なのは、ミシェル・フーコーの「性（セクシュアリティ）の装置」と権力概念である。「性の装置」という言葉は、性が人間の生き方全てや社会全体の「しくみ」に関わることを端的に示している。つまり、その「しくみ」が想像以上に巨大で複雑なものだと示すことで、性に関する研究の重要性を大きく知らしめた。また、権力概念とは、権力は誰かが持っているものではなく、人と人の網の目のどこにでも存在する力であり、人々の自発的な維持によって保たれている「傾き」のようなものであるという概念である。この概念は、「支配」モデルからの脱却という点で、デリダの「脱構築」と共通する発想がある。

これら二つの歴史的な動きに共通する三つのポイントが、後述するクィア・スタディーズの三つの基本的な視座に受け継がれている（森山、2017、p122-124）。

HIV/AIDS とポスト構造主義に共通する三つのポイント

	HIV/AIDS の問題	ポスト構造主義
① 多様性と連帯の接続	ゲイだけではなく、多様なマイノリティが協力して社会問題の解決に当たる必要性。	多様な要素は一つの「構造」に組み込まれ序列化され、その序列化は転倒されうる。
② 差別への抵抗の契機の探求	繰り返される根強いゲイや女性などへの差別の存在。	構造内に構造を食い破る契機がある。
③ アイデンティティの両	アイデンティティでは解決	西洋人文学の基礎となる

義性への着目	できない問題の存在。	「主体」概念の危うさや暴力性を暴露する。
--------	------------	----------------------

(森山至貴 (2017) 『LGBTを読みとくークィア・スタディーズ入門』 筑摩書房をもとに著者作成)

これら HIV/AIDS とポスト構造主義の問題意識を引き受ける形で生まれたのがクィア・スタディーズである (森山、2017、p124-126)。そこで、厳密に同じ特徴を有しているわけではないが、セクシュアルマイノリティに関する一定の視座を、一般化しつつ以上の表にまとめた三つのポイントに対応させる形で述べる事が可能になる。

一つ目は「差異に基づく連帯の志向」である (森山、2017、p126)。クィア・スタディーズは、多様な性のあり方を、序列化することなく関連づけて考察することを旨とするものである。特に、ゲイ中心主義はセクシュアルマイノリティ一般を代表しかねないために批判の対象となり、多様な性のあり方の序列化が研究の中にまぎれてしまうことが警戒される。つまり、差異に基づく連帯の志向とは、「異なる状況におかれたそれぞれのセクシュアリティが掲げる多様なよりよい生き方の形と、社会の平等性や公平性とを可能な限り両立させようとする事 (森山、2017、p162)」であると言い換えることができる。

二つ目は「否定的な価値づけの積極的な引き受けによる価値転倒」である (森山、2017、p126-127)。「クィア」という言葉は本来、男性同性愛者やトランスジェンダー女性に対するかなり暴力的な侮蔑語として用いられていた。しかし、否定的なニュアンスをもつ言葉で呼ばれた側が、あえて自らその言葉を用いることで、その内実やイメージを定義する力を当事者に取り戻そうとする考えもある。また、否定的なイメージの内情を拒否するだけでなく、そもそもそのイメージを抑圧者側が決定してしまうおかしさをはっきり示すために、あえてその否定的な言葉で自らを名乗る、というのが「クィア」という言葉を選択した理由である。すなわち、クィア・スタディーズは、与えられた構造の中で劣位にあるものが、その位置にあるがゆえに構造内の序列を引っくり返すことができる、あるいはしてしまう契機を探る学問である。

三つ目は「アイデンティティの両義性や流動性に対する着目」である (森山、2017、p127)。マイノリティは一貫したアイデンティティを持つべきで、それによって政治運動が可能になるという考えのもと、ゲイ解放運動を含め、それまでのセクシュアルマイノリティについての学問は研究が進められてきた。しかし、徐々に、その発想の弊害や、それが課されることの功罪を考えるべきだと捉えられるようになった。マイノリティは固定的なアイデンティティで繋ぎ止められることがなく、常に変容しうる存在であることを考慮すべきなのである。

クィア・スタディーズとはどのような学問なのかという問いの答えは、以上の三つの視座であり、「ほとんどの場合セクシュアルマイノリティを、あるいは少なくとも性に関する何らかの現象を、差異に基づく連帯・否定的な価値の転倒・アイデンティティへの疑義といった視座に基づいて分析・考察する学問」というのが最大公約数的な説明になる (森山、2017、p128)。次では、セクシュアルマイノリティをめぐる事象について、これらの視座に当ては

めて検討することで、クィア・スタディーズの使い勝手を確認する。

3-2. 三つの視座の応用－同性婚を例に－

まず、森山は「同性婚」に関する誤解を解くところから議論を始めている（森山、2017、p158-161）。2015年、東京都渋谷区が「男女平等及び多様性を尊重する社会を推進する条例」を施行し、その中で同性カップルを「結婚に相当する関係」と認める「同性パートナーシップ」証明書の発行を認めたというニュースは当時、テレビや新聞など様々なメディアで取り上げられた。その際、「同性パートナーシップ」ではなく、「同性婚」として取り上げられることもあった。また、その後いくつかの地方自治体でも制度化が進んだが、その全てが同性パートナーシップに関する施策であり、同性間の婚姻関係が必ずしも同性婚に関するものではない。そもそも日本では法律上同性婚は可能になっていない。それなのに、日本では「同性パートナーシップ」が「同性婚」と混同される場合が多く見受けられるのは一体何故なのだろうか。現在、「同性婚」は婚姻の格下にあたる別物の制度であり、同性パートナーシップ制度は婚姻ではないのだから、同性婚と呼んでもかまわないだろうという考え方と、現状では誤りであることを承知の上で同性パートナーシップ制度の将来的な目標として「同性婚」という言葉を使用しようとする考え方が存在している。つまり、理念としても、具体的な制度としてもいずれ同性婚が成立することが望ましいという結論がここでは導き出される。それに対し、セクシュアルマイノリティへの差別を許さないがゆえに、理念、制度としての同性婚を支持しないという考え方も存在する。そこで、理念、制度としての同性婚に対する異なる制度設計の可能性を探るために、クィア・スタディーズの基本的な視座を照らし合わせていく。

まず、同性婚を「差異に基づく連帯の志向」という観点から検討する（森山、2017、p162-165）。これはすなわち、「同性婚の実現と『セクシュアルマイノリティ全体の多様な性のあり方が今以上に肯定されること』が繋がるかを考えること（森山、2017、p162-163）」である。「同性婚が認められると、セクシュアルマイノリティ全体への理解や受容が進み、同性愛者だけではなく、他のセクシュアルマイノリティの生き方もより良くなる」という仮説があったとする。しかし、それはバイセクシュアルの人々の同性婚の可能性を見逃しており、そういった人々への差別を助長しかねない。このことから、同性婚はそれに関連するセクシュアルマイノリティの生き方をより良くすればよく、それ以外のセクシュアルマイノリティの生を悪くさえしなければよい、という基準を設けることができる。ただし、そもそもセクシュアルマイノリティを同性婚に関連のある人とそうではない人に分けること自体が難しい。その様にセクシュアルマイノリティを分別することは、セクシュアルマイノリティの中に新たな差別や不平等を生むことに繋がりがかねない。同性婚をめぐる議論が特定のセクシュアルマイノリティだけをマジョリティ側に入れてよしとするような失敗に陥らないようにするために、クィア・スタディーズの視座が必要とされている。

次に、「否定的な価値づけの積極的な引き受けによる価値転倒」という観点から検討する

(森山、2017、p165-166)。同性婚をめぐる議論が活発化するとともに、そもそも結婚自体がそれほど大事なものなのかという疑問が浮かんでくる。そこで、婚姻関係が重要である理由を検討することで、「同性パートナーシップ」制度の意義や可能性を明らかにすることができる。すなわち、「同性婚」という否定的なニュアンスを持つ制度が、どのようにこれまでの価値を転換させることができるのかを検討する。元々、結婚という制度は同性愛者の社会運動において批判の対象であり、羨望の対象ではなかった。それが、1990年代に入ると同性間の婚姻関係が社会運動の目標として支持を受けるようになった。その理由は、エイズ問題とレズビアン・マザーの存在である。当時、エイズによって多くのゲイやバイセクシュアルの男性が亡くなる中、そのパートナーたちは患者の家族によって病室や自宅から排除され、患者の治療や最期に付き添うことができなかった。そこで、排除された男性たちは、そうしたことが認められるようにするため、配偶者という制度的な「お墨付き」を求めようになった。また、同じく1990年代には、夫と別れてレズビアンとして女性パートナーと子育てをする女性が増加した。そこで、カップル双方が親として子育てに関わることができるよう、制度的な婚姻という「お墨付き」を必要とした。以上のことから、同性間の婚姻を求める人々が本当に必要としているのは、異性間のものと同じ「結婚」という形なのか、それとも生活上のニーズが満たせるのなら別の形でもよいのかという問いが浮かんでくる。

そこで、次にパートナーシップ制度自体の意義について検討する(森山、2017、p167-168)。パートナーシップ制度は様々な国や地域に存在するが、その仕組みは多様で、同性カップルにとって必ずしも結婚の代替物となっているわけではない。中でも注目したいのが、フランスで導入されている積み増し型のパートナーシップ制度である。同性婚制度の成立以降もパートナーシップ制度が存続できるのが積み増し型の特徴であるが、フランスはカトリックの影響で離婚のハードルが制度上高いため、PACS（民事連帯契約）と呼ばれるパートナーシップ契約が同性間だけでなく、異性間いずれのカップルによっても多く結ばれている。このフランスのようなパートナーシップ契約は異性間にも認められていることから、差別の中で妥協的に生み出されたパートナーシップ制度が単なる「結婚もどき」ではなく、しっかりと意義を持つ制度として新たな価値観を提示できるかもしれないものであり、「結婚」という価値をかく乱し、転覆させるという可能性を秘めている。

別制度型	契約登録型
異性間カップルには婚姻、同性間カップルにはパートナーシップ制度を当てはめる。	パートナーシップ制度を異性間・同性間双方に認める。
吸収型	積み増し型
同性婚制度の完成と同時にパートナーシップ制度を終了する。	パートナーシップ制度が同性婚制度の成立以降も存続する。

(森山至貴 (2017) 『LGBT を読みとくークィア・スタディーズ入門』 筑摩書房をもとに著者作成)
最後に同性婚とパートナーシップ制度の比較の検討を行う (森山、2017、p169-170)。例

例えば、夫婦別姓が認められていない場合、共働きカップルなどにとってはパートナーシップ制度のほうが魅力的である。また、フランスにおいては、宗教上の問題からカップル解消が容易なのはパートナーシップ制度のほうであるが、その要件に関して日本においてはフランスとは異なるアプローチが必要である。カップル解消という論点は、特定の相手と長く関係を続けるのがそれほど偉いことなのか、なぜカップルが法的保護の対象となるべきなのかといった問いに帰結する。全てのことをパートナーシップの権利保障の枠の中で解決しようとする、パートナーと生きているわけではない独り身の人の権利を侵害することになりかねない。そもそもクィア・スタディーズは、性的指向や性的自認を固定的で永久に不変なものとして決めつけることを批判する学問である。そのため、性的欲望や関係性の可変性を制限する危険性をはらんでいるため、特定のパートナーとの永続的な関係を求める同性婚制度には、歯止めをかける必要がある。同性婚、同性パートナーシップに関する議論は、「カップルだと得をする社会が望ましい社会なのか」という議論を開き、このことは軽視してはならない。

4. 先行研究の意義と限界

先行研究では、まず LGBT の増加とカミングアウトの関係性や現状について説明し、伝える側、伝えられる側双方の視点から、当事者たちにとってカミングアウトがどのような意義や問題を持っているのかを確認した。カミングアウトは、自分の気持ちを他の人と共有したい、異性愛者だと誤解されたくない、大切なパートナーの最期に立ち会いたいなどといった理由からされることが多い。ここで疑問なのが、全ての非異性愛者が日常的にカミングアウトをするかしないか悩んでいるのか、ということである。多様な生き方を求めるセクシュアルマイノリティにとっては、あえてカミングアウトをしないという人もいるのではないだろうか。また、カミングアウトをされる側は、その時の行動や態度がカミングアウトをした人に対して大きな影響を与える。たとえ否定的な感情を抱いていたとしても、相手を思った行動をしたほうがよい。

次に、性の多様性を扱うための学問であるクィア・スタディーズについて説明し、その中で、クィア・スタディーズが持つ基本的な三つの視座を紹介した。この三つの視座はセクシュアルマイノリティが抱える問題を検討するのに非常に有効である。そこで、まずその三つの視座それぞれについて説明をした後、同性婚という現代のセクシュアルマイノリティが抱える問題を例にしてその使い勝手を確認した。ここで少々抽象的で理解しにくかったクィア・スタディーズの基本的な視座の応用の仕方を示し、以降ではこれを用いながら本論分のメインテーマであるカミングアウトについてインタビュー分析を行う。また、同性婚が要求されるようになった経緯として、病気のパートナーの親などからの排除や拒絶が挙げられたが、この問題はカミングアウトとも関連性がある。同性婚やパートナーシップは、社会から同性間の婚姻を認めてもらえる制度という点において、社会に対するカミングアウトであるとも捉えられる。したがって、同性婚という例はクィア・スタディーズの視座の応用

例を示すだけには留まらない意義がある。

しかし、西欧諸国の歴史的背景をうけてアメリカで誕生したクィア・スタディーズの視座をそのまま日本に適用してもよいのだろうか。例えば、アメリカでは HIV/AIDS の問題を通してアイデンティティによる社会運動の限界が露呈されたが、日本では HIV/AIDS を通してアイデンティティが重要視されるようになったという明確な違いがある（森山、2017、p117）。また、日本には日本特有の性質や家族規範、異性愛規範やマイノリティへの嫌悪が存在する（川坂、2013）。アメリカの思想を鵜呑みにせず、日本独自の問題とも照らし合わせながら考察を深めることが求められるのではないだろうか。

5. インタビュー分析

5-1. インタビュー概要

今回、実際にカミングアウトを行った大学生にインタビューを実施した。対象者はマレーシア人の男子留学生（N）で、2017年から日本に滞在している。Nは現在20歳で、ゲイであることをマレーシアと日本の両国においてカミングアウトしている。インタビューの結果は、カミングアウトに関する先行研究のように伝える側、伝えられる側の観点からと、Nが感じた日本におけるセクシュアルマイノリティという項目に分けてまとめて記す。また、そのインタビュー内容を元に、カミングアウトという事象をクィア・スタディーズの視座から分析していく。インタビューする内容は、NHKが2015年に実施したLGBT当事者アンケート調査の質問項目を参考にしつつ行った（NHK ONKINE、2015年）。

5-2. 伝える側、伝えられる側としてのカミングアウト（インタビュー結果）

5-2-1. 受け入れてもらえない苦しみ

Nが初めてカミングアウトをしたのは14歳の時で、その相手は仲の良いクラスメートAであった。Nはクラスメートの男子Bに対して恋愛感情を抱いていた。そのことを手紙でAに伝えたという。カミングアウトをした理由は、同性を好きになってしまったことへの不安や戸惑いを相談するためであった。Nも多くの人と同じように、幼い頃からずっと異性に恋心を抱くのが当たり前だと思っていた。しかし、初めて恋をした相手が女性ではなく男性であったため、同性を好きになってしまった自分のことが怖かったという。また、女性を恋愛対象として見るができない自分に対し、「なぜ自分は他の子と違うのか、なぜ男の子が好きなのか」といった疑問が溢れたという。特に当時はマレーシアだけではなく、世界中でLGBTのことがまだあまり知られておらず、インターネットで検索してもそれが正しい情報か、信じてよいのかどうか分からなかった。Nはインターネットなどで調べても正解が見つからない自分の存在をますます怖いと思うようになった。また、マレーシアでは同性愛は法律で禁止されていたため、家族にも先生にもなかなか相談ができなかった。そのため、信頼していたAにだけ自分がゲイであり、Bのことが好きであることをカミングアウトしたそうだ。

しかし、この時のカミングアウトは N に辛い出来事をもたらした。A がカミングアウトについて書かれた手紙をなくしてしまい、B 本人や他のクラスメートに、N がゲイであることや B のことが好きだということがばれてしまった。B は中学校で有名人であり、ゲイに対して嫌悪感を持っていたため、学校中に N のセクシュアリティをばらしてしまい、マレーシアでは同性愛が違法であったこととも相まって、N は危険人物扱いをされたり、無視されたりするようになった。その時のことを N は、「1 年間くらい鬱状態で、辛く苦しかった」と語った。また、N はその影響で 15 歳の時に自殺を図った。家族に発見されて助かったが、N が自殺を図るほど一人で悩みを抱え込み、追い詰められていたことに家族はショックを受けていたようで、その時の母親の泣き顔は一生忘れることはないという。

5-2-2. 自分を肯定的に受け入れる

N は現在ゲイであることを隠さずに生きている。自殺未遂を図るほど追い詰められていた N が、肯定的に自分を受け入れられるようになったのには理由がある。一つは、セクシュアルマイノリティに関する映画やサポートを表明する有名人による影響である。映画に関しては、ゲイについて描かれた映画をいくつか見て、ゲイが危険なことではないことが分かり、そのことが N を安心させた。有名人に関しては、レディー・ガガやビヨンセ、クイーンの名前が挙げたが、曲だけではなく、インタビューやセクシュアルマイノリティのコミュニティや活動を支援していることが大きく N に影響を与えた。「やっぱり有名人からのサポートは影響力がある。自分が悩んでいた時も、有名人がサポートしていることだからきっと怖いことじゃない、本当に悪いことなら有名人は絶対サポートしていないはずって思えた。ちょっと幼い考え方かもしれないけど、有名人が言うことは多分悪いことじゃない、だから自分はそんなに悪い人じゃないって自信になった」と N は語った。

もう一つは、周りの人々によるサポートである。家族に初めてカミングアウトをしたのは自殺を図った日である。その時、母親は、子供の頃からの N の言動などからゲイかもしれないとうすうす気づいていたため、それほど驚かなかったそうだが、父親はまだショックですぐには N のことを受け入れることはできなかった。しかし、愛する息子のことを次第に理解してくれるようになり、今ではサポートしてくれているという。また、高校で出会った友人たちの存在も N を支えた。N は 14 歳でのカミングアウトの後不登校になった。N は元々太っていた自分の見た目にコンプレックスを抱いていたが、不登校であった期間にストレスで何も食べることができず痩せて自信がついたこと、さらに臨床心理士のカウンセリングを受けていたことで、だんだん鬱状態から解放されていった。また、マレーシアでは公立学校よりも私立学校のほうが明るく、オープンマインドの子が多いため私立高校に進んだ。高校では、中学時代のトラウマが残っていたため友達ができるか不安だったが、最初に自らカミングアウトをしたという。カミングアウトをしても皆 N を受け入れてくれ、たくさんの友達が N のことをサポートしてくれたおかげで、自分のことを肯定できるようになり、現在、明るくてオープンな性格でいられるのだと語った。

5-2-3. 自分らしく生きる

Nにとってカミングアウトをしてよかったことは、友達、家族、初対面の人を含め、誰に対しても嘘や秘密がない状態でいられることである。例えば、男性だけの集まりなどに行くと必ずと言っていいほどあの子がキレイだとか、セクシーだとかというような女性の話になる。そういう話になったときに自分がゲイであることを隠したままであったら、嘘をついてまで皆と話を合わせなくてはならない。また、カミングアウトをしていなかったら彼氏ができたとしても友達に言えないので、悩みなども相談できないし、嬉しいことも共有できず、とても苦しいはずである。「秘密がない状態にいるのはとても楽で、嘘をついて偽りの自分を演じなくていいからよかった」とNは語った。Nはカミングアウトをしたおかげで、嘘のないありのままの状態自分らしく生きることができている。また、NはLGBTなど関係なくいろいろな人と友達になりたいと思っている。実際、LGBTの友達はマレーシアでもあまりおらず、日本でも10人未満だそうだ。NはLGBTというコミュニティに依存しすぎたら、それ以外のコミュニティに友達ができなくなるのではと危惧している。LGBTの中には社会のなかで生きづらさを感じ、同じ悩みを抱えた人々が集まり、心の拠り所となるような場を求める人が多数存在する。Nも、ゲイプライド期間にそういった人々が集まる場として有名な新宿二丁目に行き、LGBTの人たちの話を聞いたり、パフォーマンスなどを見たりしたことがあるそうだ。しかし、NはLGBTであるとか異性愛者であるとか関係なく自分自身を受け入れてくれる人と親交を深めていくことを一番に求めている。そうしたことから、Nが自分らしく生きることを大切にしていることが伺える。

5-2-4. 伝えられる側としてのカミングアウト

Nが初めてカミングアウトをした時、カミングアウトの大きな問題となっているアウトティングが起きた。Nがゲイであることが広まってしまった原因は、カミングアウトについての紙をAがなくしてしまったことであるが、一番の要因はその紙を拾った誰かが、Nに許可なくそのことを多数の学生に暴露してしまったことにある。つまりアウトティングが直接的な原因である。Nはまず、カミングアウトをした相手であるAのその時の心境について、次のように推測している。「本当に紙はなくしたのか、実はBに言ってしまったのか、今となっては分からない。信頼していたけど、Aは急にカミングアウトをされて驚いたのか、怖かったのかもしれない」。また、アウトティングとそれに伴う学生たちの心無い態度や言動によって、Nは自殺未遂を図るまで追い詰められた。特に、好きだった人に無視され、周りに言いふらされたことは余計にNを苦しめることになった。しかし、Nは周りの学生たちがNのことを受け入れることができなかったことに対して、一定の理解を示している。特に思春期は、セクシュアルマイノリティ当事者でさえも自分のことを受け入れるまでに葛藤や不安を抱えやすいことは先行研究でも述べた通りである。当事者でも時間がかかるのに、当事者ではない側がすぐに受け入れるのは容易ではない。「当時はまだみんな14歳

で子供だったし、インターネットもまだあまり普及していなかったから、マイノリティを理解できなかったことは仕方のない部分もあった」とNは語っている。

5-3. 日本におけるセクシュアルマイノリティ（インタビュー結果）

Nは日本では恋愛などに関して自分に聞く人がいないならわざわざ自らカミングアウトはしないが、聞く人や機会があればカミングアウトをするというスタンスをとっている。その理由は、「日本のこの雰囲気だったらまだサポートできない人がいると思うから」という。「この雰囲気」とは、日本ではまだカミングアウトをしている人が少なく、セクシュアルマイノリティやカミングアウトに対する十分な理解が得られていない状況をさしている。Nの大学の友達も含め皆普通に接してくれ、N自身が日本でカミングアウトをしたことによって嫌な思いをしたことはない。しかし、日本で嫌な思いをしたことがないのは、Nが今大学生であり、周りの人間も皆大人だからだと思うと語った。Nの日本人のゲイの友達の話になるが、彼もNと同じように中学生の頃からずっと鬱に悩まされており転校を繰り返していた。しかし、どの学校でも彼がゲイであることが広まると友達ができなかったそうだ。Nはそれを聞いて、中学校や高校ではまだまだセクシュアルマイノリティに対して理解が進んでいないし、日本は先進国なのにまだこんなに遅れていることに驚いたという。

また、彼氏ができないことがNの現在の悩みである。日本はまだカミングアウトをしている人数がとても少ないため、なかなか相手が見つからないのだという。たとえ彼氏ができたとしても自分が日本人だったら皆に秘密で付き合うか、家族の希望通りに女性と結婚すると思うとも語った。先行研究でも家族や家を継ぐことに重きを置き、異性と結婚する例を示したが、自分の意志ではなく家族の希望通りに女性と結婚するということは実際多いそうだ。Nが新宿2丁目に行ったときに話をした日本人のゲイ男性も女性と結婚していたという。このゲイ男性の妻はレズビアンであり、二人は家族のために結婚をただけで、子供もおらず、それぞれ他に付き合っている人がいる。そのゲイ男性が、今の日本ではこのような状態がセクシュアルマイノリティにとってが一番いい状態だと言っていたという。この男性は相手がレズビアンだったので、結婚とはいっても友達とシェアハウスをしているような感覚のため、お互いにとってそれほどマイナスなことではない。しかし、実際はこうした家族のための結婚は相手がストレートである場合が多く、その場合は、結婚生活を窮屈に感じたり、愛することができないことへの罪悪感に苛まれたりし、辛い思いをすることが多いという。Nは、日本は家族や社会の希望があり、そのために自分の幸せよりもそちらを優先することが多く、自分のためではなく他の人のために生きているような感じがして少し悲しいと語った。

5-4. クィア・スタディーズの視座からの検討・分析

ここからはインタビュー内容からカミングアウトという事象を、4で指摘した先行研究の限界も織り交ぜながらクィア・スタディーズの視座で検討、分析していく。まずは、「差異

に基づく連帯」という観点から見ていく。ここでは、カミングアウトによってセクシュアルマイノリティ全体への理解や受容が進み、他のセクシュアルマイノリティの生き方もよりよくなるかを検討する。つまり、カミングアウトの広まりによって、他のセクシュアルマイノリティに新たなネガティブな問題が生まれないかどうかの検討である。Nは、カミングアウトは聞かれたり言う機会あったりすればするが、そうでなければする必要はないと考えている。一概には言えないが、生活に支障をきたすことがあるトランスジェンダーの人はカミングアウトをする場合が多いが、同じセクシュアルマイノリティの中でも、同性愛者や両性愛者の中には、Nと同じようにカミングアウトをあえて自らしなくてもよいと考えている人が存在する（男女共同参画WEBマガジンEPOCA、2017年）。特にNは、セクシュアルマイノリティという枠に囚われることなくいろいろな人々と関係を築いていきたいと考えている。つまり、カミングアウトをしている、またはその意向がある人だけがセクシュアルマイノリティとして捉えられ、そうした人々の存在が見過ごされるべきではない。セクシュアルマイノリティの生き方には多様性があることを理解し、カミングアウトをしている人だけを見て他のセクシュアルマイノリティを判断しないことが必要なのではないだろうか。

次に「否定的な価値づけの積極的な引き受けによる価値転倒」という要素を検討する（森山、2017）。カミングアウトやゲイ、レズビアンといった名称は、ネガティブな一面を持っているが、どのように価値を転倒できるだろうか。Nは初めて恋をした時、その相手が女性ではなく男性であったことに不安や恐怖を抱いていた。自分のセクシュアリティを隠したまま生きている当事者にとっては、ゲイやレズビアンであることは悪いことのように感じられるのである。それは、自分自身のセクシュアリティを認識する前から根付いてきた異性愛規範と実際の自分が異なることへの不安や絶望、また、ゲイやレズビアンを社会がどうイメージしているのかを見てきたために、セクシュアルマイノリティとしての自分を肯定できないからであると考えられる。Nはその時、有名人たちがセクシュアルマイノリティへの支援を表明していたことで、自分に対する否定的な気持ちに変化したとしている。有名人は多くの人に知られた存在であり、その発言や行動の影響力は大きい。先行研究からも、有名人によるカミングアウトや有名企業の支援が人々を勇気づけていることが分かる。有名人がメディアなどを通じてセクシュアルマイノリティを肯定してくことで、Nの不安や恐怖が取り除かれ、自分は危険な存在ではなく、ゲイであることも隠す必要がないと思えるようになったと考えられる。また、Nがゲイプライド期間に新宿二丁目に行ったと語っていたが、ゲイプライド期間にはパフォーマンスだけではなくパレードなども行われる。これらはセクシュアルマイノリティが目に見える存在であることを、社会に対してアピールする場でもある。否定的なイメージを持たれてきたセクシュアルマイノリティたちが、あえて可視化できる存在として社会に立つことで、積極的に人々の意識を変えようとしているのではないだろうか。Bはゲイへ嫌悪感を持ち、Nのことを傷つけるような行動をとってしまったが、それは当時の時代背景や同性愛が法律違反だったことでゲイが可視化できるような

存在ではなかったからではないだろうか。もっとゲイがどういう存在で、どのように生きているか知っていたならば、Bのゲイに対する嫌悪感が完全になくなるわけではないかもしれないが、Nに対する行動は違ったものになっていたのでないかと考えられる。

最後に、「アイデンティティの両義性や流動性」の観点から検討する(森山、2017)。Nはカミングアウトをしてよかったこととして、嘘をつかずにありのままの自分で生きられるようになったことを挙げていた。カミングアウト前は自分に自信を持たず、自分のことを隠してきたNであるが、カミングアウトをし、だんだん周りに受け入れてもらうことでそのようなアイデンティティを確立していったと考えられる。カミングアウトの増加は、そうしたアイデンティティの確立であったり、喜びや悩みを共有する機会を与えたりし、その結果、人々のセクシュアルマイノリティへのイメージを肯定的に変化させていくという正の側面を持っている。その一方で、負の側面も持ち合わせている。Nはインタビューの中で、日本人は家族や社会のために嘘をつく傾向があることを指摘していた。この嘘というのは、社会に深く根付いた異性愛規範や家族規範が引き起こしていると考えることができ、こうした規範が消えない限り、セクシュアルマイノリティにアイデンティティの自由はなく、むしろアイデンティティが否定、あるいは目に見えないところに隠されてしまうことが危惧される。こうした負の側面は、ただカミングアウトをする人が増加するだけでは解決しきれない問題であると考えられる。

6. まとめ

今回、カミングアウトを実際に行った大学生にインタビューを実施し、インタビュー内容をカミングアウトに関する先行研究の項目に沿ってまとめ、最後にクィア・スタディーズの視座からインタビュー内容を分析し、カミングアウトの問題や可能性を明らかにした。先行研究にもあったように、Nは嬉しいことを共有したり悩みを相談したりしながら他者と関わりあっていくため、自分がゲイであることを隠さずありのままに生きていることが分かった。ただ、あえて自分からカミングアウトをすることはなく、そうしなくても自分らしく生きていけるという道筋を示してくれた。Nはゲイであることを隠さないし、いつも笑顔で明るいムードメーカー的存在であるので、今回インタビューをして、カミングアウトをめぐる命に係わるほど辛い経験をしていたことを知り、大変驚いた。そのことによって、カミングアウトがより身近なものであるとともに、した側、された側共に様々な葛藤や不安を抱え、必死にそれを乗り越えようとしているのだと改めて実感することができた。

また、クィア・スタディーズの視座から、カミングアウトの抱える問題点と今後の可能性について検討した。そこから、セクシュアルマイノリティには多様な生き方があることを理解し、一部の人々のみから他のセクシュアルマイノリティを判断すべきではないこと、有名人や有名企業などによる行動や支援は影響力が大きく、セクシュアルマイノリティにとって自己を肯定したり、自分に自信を持ったりする契機を与えること、セクシュアルマイノリティが目に見える存在として社会や周りに認識されることで人々の意識を変えられる可能

性があること、さらに日本に深く根付いた異性愛規範や家族規範が、セクシュアルマイノリティのアイデンティティを隠したり否定したりしてしまうことの問題を示した。

カミングアウトとは、伝えれば終わりというわけではなく、「伝える側と伝えられた側との関係が作り直される行為の始まり（砂川、2018、p3）」である。双方の間に考え方のズレや誤解があるのは当然である。そのズレや誤解を乗り越え、お互い理解しようとする人が増えれば、カミングアウトする人も増えるだろう。カミングアウトをする人が増えれば、それだけセクシュアルマイノリティに対する嫌悪もなくなり、多様な性のあり方、生き方が受け入れられ、カミングアウトをしやすくなる社会が来るはずである。そして、理想論かもしれないが、いつかはカミングアウトをしなくても誰もが幸せに自分らしく生きていける社会が来ることを期待したい。

7. 参考文献、参考資料

〈参考文献〉

- ・ 河口和也（2003）．『思考のフロンティア クイア・スタディーズ』岩波書店．
- ・ 砂川秀樹（2018）．『カミングアウト』朝日新聞出版．
- ・ 森山至貴（2017）．『LGBTを読みとく - クイア・スタディーズ入門』筑摩書房．
- ・ 川坂和義（2013）．「アメリカ化される LGBT の権利：『ゲイの権利は人権である』演説と〈進化〉というナラティブ」『Gender and Sexuality : Journal of the Center for Gender Studies, ICU』第 8 号、5-28 頁．

〈参考資料〉

- ・ NHK ONLINE.
<http://www.nhk.or.jp/d-navi/link/lgbt/> 2019/1/11 アクセス。
- ・ HuffPost.
https://www.huffingtonpost.jp/soushi-matsuoka/outing-hitotsubashi-uni-responsibility_a_23483045/ 2019/1/13 アクセス。
- ・ dentsu NEWS RELEASE
<http://www.dentsu.co.jp/news/release/pdf/cms/2015041-0423.pdf> 2019/1/12 アクセス。
<http://www.dentsu.co.jp/news/release/pdf/cms/2019002-0110.pdf> 2019/1/12 アクセス。
- ・ 株式会社博報堂 DY ホールディングス 株式会社 LGBT 総合研究所
<https://www.hakuhodo.co.jp/uploads/2017/02/20170208-1.pdf> 2019/1/12 アクセス。
- ・ 男女共同参画 WEB マガジン EPOCA.
<https://azarea-epoca.jp/melimelo.html> 2019/1/14 アクセス。
- ・ JAPAN Forbes.
<https://forbesjapan.com/articles/detail/2407> 2014/1/14 アクセス。
- ・ 『日本経済新聞』、2014 年 9 月 9 日、夕刊 2 頁。
- ・ 『日本経済新聞』、2016 年 8 月 5 日、21 頁。

